

**編集後記：**新年を迎えてしばらくすると、北海道オホーツク海沿岸から流氷の便りが届き始めます。例年ですと、流氷は2月上旬には北海道オホーツク海沿岸を覆い始め、4月の流氷終日まで、3ヶ月近く北海道周辺に居座ります。年によっては根室海峡を通過して太平洋へ流出し、釧路などでも流氷が観測されます。黄海や渤海あるいはピョートル大帝湾などでも海水の結氷は起こりますが、これらは大きく移動することはありません。北半球で「流氷」が見られる最南端は、北海道ということになります。

少し前までは、漁業の妨げになり、時には漁船を遭難させてしまう「厄介者」としか考えられていなかった流氷も、今では観光資源として活用されるようになりました。また、流氷がプランクトンの住処となり漁場を豊かにしていることや、波浪や塩害を防ぐことなど、流氷のもたらす良い面についても明らかになってきました。

流氷の観測は、衛星によるものが現在主流です。一度に広範囲を捉えられることに加え、最近では、センサーの高分解能化や雲を透過して観測できるマイクロ波放射計や散乱計あるいは合成開口レーダーなどを搭載した衛星の充実などにより、流氷の観測に対する衛星の役割はますます大きくなっています。しかし、航空機や船舶による目視観測も防災には欠かせません。

これらは、衛星ほど広範囲には観測できませんが、流氷を間近で観測できることから、衛星では分からない細かい流氷を見つけることができ、沿岸防災に役買っています。今でこそ防災を目的とした航空機による流氷観測も、そもそもは1935年3月の農林省の冷害対策事業としての調査が始まりでした（観測は中央気象台（現在の気象庁）が担当）。当時はオホーツク海の流氷と夏の天候との関連を調べることが目的で、観測結果は米相場に悪用されないように極秘扱いだったそうです。インターネットを使えば、ほぼリアルタイムで流氷の状況が分かる今からすると考えられない話ですね。

2008年に発刊された気象庁地球温暖化予測情報第7巻では、21世紀終わりには、オホーツク海の海水域面積は現在の8割程度まで減少すると予測されています。ひょっとするとその頃には、流氷が北海道沿岸に到来しなくなっているかもしれません。「昔は、冷害対策や沿岸防災のために飛行機から流氷を観測していたんだよ」と、孫やひ孫に話しても俄かには信じてもらえないかもしれませんね。ようやく「厄介者」の持つ良い面が見えてきて、今後は仲良く付き合っていけると思うのですが、長い付き合いはできないのでしょうか？

(近澤昌寿)